アジア視察報告＜１４＞

視　察　項　目	中小企業連携促進
視　察　日　時	２０１６年１０月２７日（木） 午後１時４５分～３時
視　察　先　名	ラオス日本センター
説　　明　　者	ラオス日本センター チーフアドバイザー 鈴木 康次郎 氏
担　　当	飯塚 正良、山田 益男、林 敏夫

【はじめに】

ラオス日本センターは、２００１年にラオス国立大学内に開設され、ラオスにおけるビジネス人材育成機関のパイオニアとして、ビジネス人材育成と現地経営人材･日本企業間のネットワーク構築を支援しており、その成果が注目を集めている。今回の視察では経済の情勢、人材育成の必要性や、ラオス日本センターの概要、主たる事業や活動について現地の実態を把握するとともに、川崎市における人材受け入れや、市内中小企業が海外進出する際の課題等について、視察を実施した。

【ラオスにおける昨今の情勢と産業人材育成の必要性】

①昨今の情勢

・海外直接投資（ＦＤＩ）の急増（中国、タイ、ベトナム）
・ＡＳＥＡＮ経済共同体（ＡＥＣ）の発足（２０１５.１２～）
・第８次国家社会経済開発５カ年計画の開始（２０１６～２０２０）
　→２０２０年までに後発開発途上国（ＬＤＣ）脱却
・本年はＡＳＥＡＮ議長国
・日本によるアジアにおける産業人材育成協力イニシャティブ（３年間で４万人を育成）

②産業人材育成の必要性

・海外直接投資（ＦＤＩ）で必要となる人材の育成

・ＡＥＣで競争できる人材の育成
・国家開発へ貢献できる人材の育成

【ラオス日本センター（ＬＪＩ）の概要】

①日本センターの経緯

市場経済化支援として、旧社会主義圏に９カ国１０センター設置されている。ビジネス人材育成、日本語教育、文化・相互交流の３本柱の稼働を実施している。

②ＬＪＩの経緯

ラオス国立大学経済経営学部とパッケージ協力でスタートし、無償資金協力で施設建設、技術協力で組織・人材育成を進めている。

③ＬＪＩの組織

ラオス国立大学(学生総数２５，０００人のラオス最大の大学)の付属機関でビエンチャン首都圏のドンドック・キャンパス内に立地している。経営学修士（ＭＢＡ）コースを開設、２０１５年より他の学部と同等の制度(institute)に格上げし修士号を授与している。

大学派遣職員３２名、センター雇用職員８名の４０名で、所長、副所長２名、課長４名人事・総務部門で構成されている。

【主な調査内容】

①主たる事業及び活動

●ビジネス人材育成

・ＭＢＡプログラム

２年間コース、毎年３５名を上限とし、現在第８期と９期生が在学中である。

・実践ビジネスコース

２週間程度のコースで､年間１８コース程度計画している。

・テーラーメイド（オーダーメイド）コース

企業ニーズに対応した研修を実施している。

・現場指導、コンサルテーションを無償提供している。

・ビジネスフォーラム/就職フェアを年２～３回程度実施している。

●日本語教育

複数の日本語コースを実施している。

●交流活動

交流イベント、留学フェア等を実施している。

②活動成果

●フェーズ１

「ラオス国立大学経営学部及びラオス日本人材開発センタープロジェクト」

期間：５年間（２０００年９月１日～２００５年８月３１日）

・無償資金協力により日本センター施設建設、また技術協力により日本語研修棟を建設した。

・社会人を対象とした短期ビジネスコースを実施し、当時圧倒的に不足していた「市場経済を理解するビジネスマン」を２，０００人以上育成した。

・活動拡大のため、２００４年「経済経営学部支援」プロジェクトと分離した。

●フェーズ２

「ラオス日本人材開発センタープロジェクト」

期間：５年間（２００５年９月１日～２０１０年８月３１日）

・日本的経営を生かした実践的なビジネスコースを１，４００人以上に提供し、現場指導やカウンセリングも開始した。

・２００８年より、経済経営学部と合同でＭＢＡコースを設立し、２０１０年１期生として３０名が卒業した。ラオス経済の中核を担う高度ビジネス人材の育成に貢献した。

・２０１０年、過去１０年間の実績が認められ、従来のセンターから、学部と同レベルの「institute」へ格上げされ、修士号を授与できることとなった。

・技術協力予算により、ビジネス研修棟を建設した。

・ラオスにおける日本文化発信拠点として、同フェーズのみで約１３万８，０００人が相互理解イベントに参加した。

●フェーズ３

期間：４年間（２０１０年9月１日～２０１４年8月３１日）

「ラオス日本センター・ビジネス人材プロジェクト」

・ビジネス人材育成機関として、自律的な運営管理体制が構築され、運営費の約８割を収益事業で賄っている。

・第６期までのＭＢＡ修了生が１９４名となり、ＬＪＩがビジネス人材ネットワークのハブ機関となっている。

・中小企業などのニーズに対応したテーラーメイドの研修が拡大している。

＊開設以来、約４３万人以上が図書館を利用、約５，０００名以上のビジネス人材を育成、約７，５００名の日本語学習者を育成。

③ＬＪＩの提供できるサービス

・有能なラオス人の紹介（ビジネスコース修了生約５，０００名以上、ＭＢＡ修了生２２１名の人的ネットワークの活用）

・テレビ会議システム（ＪＩＣＡ-ＮＥＴ施設完備）およびセミナールームの貸し出し

・テーラーメイド研修（企業ニーズに対応した研修）の設定

・特設の基礎日本語研修の設定

・各種イベント及び交流事業設定

④ＬＪＩの重点的な取り組み

・ＬＪＩアクションプラン策定を通じた計画能力の向上

・テーラーメイド研修の受注拡大

・ＭＢＡ同窓会組織の活性化（独自の事業活動）と連携強化

・タイ「バンコク」における関係機関（ＴＰＡ、泰日工業大学、カセサート大学国際ＭＢＡ、チュラロンコン大学ＳＡＳＩＮ経営大学院他）との連携強化

・地方展開（サバナケット県を中心として）の促進

・ＬＪＩの調査研究能力の向上（実施体制の構築及び事例研究の積み上げ）
・「経営塾」の開設準備（経営者層の育成）

【ラオスの産業人材の特徴】

●前提条件

都市部における治安がよいこと、水やエネルギーの安定供給が可能。

●強み

・親日的で日本人を本当に尊敬している。
・自己主張が少なく、上司の命令に従順
・純朴で優しい人が多く、ほとんど喧嘩をしない。
・家族的な雰囲気を重視する。
・平等性を重視する。
・女性は手元が器用で目が良い。
・非熟練工の賃金は安い。

●弱み

・近代的な工場で働いた経験が少なく、農村部からの労働者が多いため、季節により無断欠勤などが起こる。
・従順という美徳がある反面、自分から創意工夫するなどの面が弱く、根気がない。
・エンジニア的なセンスに欠け、熟練工や高度人材の賃金は想像以上に高い。

【ラオスに適した投資分野】

①癒やし系産業

エコツーリズム、スパ、レストラン、旅館、リゾートホテル、介護施設など。

②農業関連分野

薬草やハーブ、有機栽培による健康食品、お酒類など。

③教育分野

簿記学校、英語スクール、経営や税務のコンサルタント、人材派遣業など。

④生活関連インフラ

無電化村向けのソーラーランタンや太陽光、小水力、バイオマスなど。

【今後のプロジェクト】

・案件名

ラオス日本センター民間セクター開発支援能力強化プロジェクト

・主管官庁

教育省

・実施機関名

ラオス国立大学

・実施期間

２０１４年9月１日～２０１９年8月３１日（５年間）

・上位目標

ＡＳＥＡＮ経済統合に対応できるビジネス人材が、ＬＪＩにて継続的に育成される。

・プロジェクト目標

ビジネス人材育成機関としてのＬＪＩの機能が強化される。

・無償資金協力との関連

無償資金協力によりラオス日本人材開発センター及び経営経済学部を建設。

・実施体制

日本側　　鈴木チーフアドバイザー、佐藤業務調査員　２名

ラオス側　ラオス国立大学長、同副学長、ラオス側所長、副所長２名、総務主任、相互理解促進主任、ビジネスコース主

任、日本語コース主任

【質疑・応答】

Ｑ１：　ラオスに進出している他の国で､同じような機能を持つ機関が進出している例はあるか。

Ａ１：　ラオスでは日本だけである。ただ、ラディカルではないが中国語などを勉強することができる場所があり、語学が中心である。韓国ではＪＩＣＡのような機関で人材育成の機関を最近設立した。

Ｑ２：　現役の人材育成を進めているが､大学生など経験のない人材に広げていく構想はあるか。

Ａ２：　現段階ではないが、毎年１名か２名の大変優秀な学生を採用することはある。

Ｑ３：　川崎から昨年進出を決定した東洋ロザイから事前レクチャーを受けた。例えば今後ラオスから優良な人材を日本で雇用したい場合の留意点はあるか。

Ａ３：　先ほど説明したように工場で働いた経験がないケースや、どのような能力を持つ人物を雇用するかにもよるが、教育のレベル格差があり人物によってかなりの差がある。その点に留意する必要がある。

Ｑ４：　現地法人で活躍している人物から、今から２０年ほど前に難民として１，０００人程のラオス人が来日し、大和市に住み､ラオス人会を創っていると聞いた。そちらの方たちと連携ができれば､川崎とラオスのつながりも促進できるのではないか。

Ａ４：　その関係者とうまく連携することは大切だと思う。また、私の日本にいる知り合いの子弟がラオスに留学することや、将来

ラオスでビジネスをすることを希望した場合、よりよい方法で橋渡し役ができないか可能性について検討している。ラオスと日本を行き来する者が増えることによって、ラオスと日本の活発な交流につながればよいと思う。

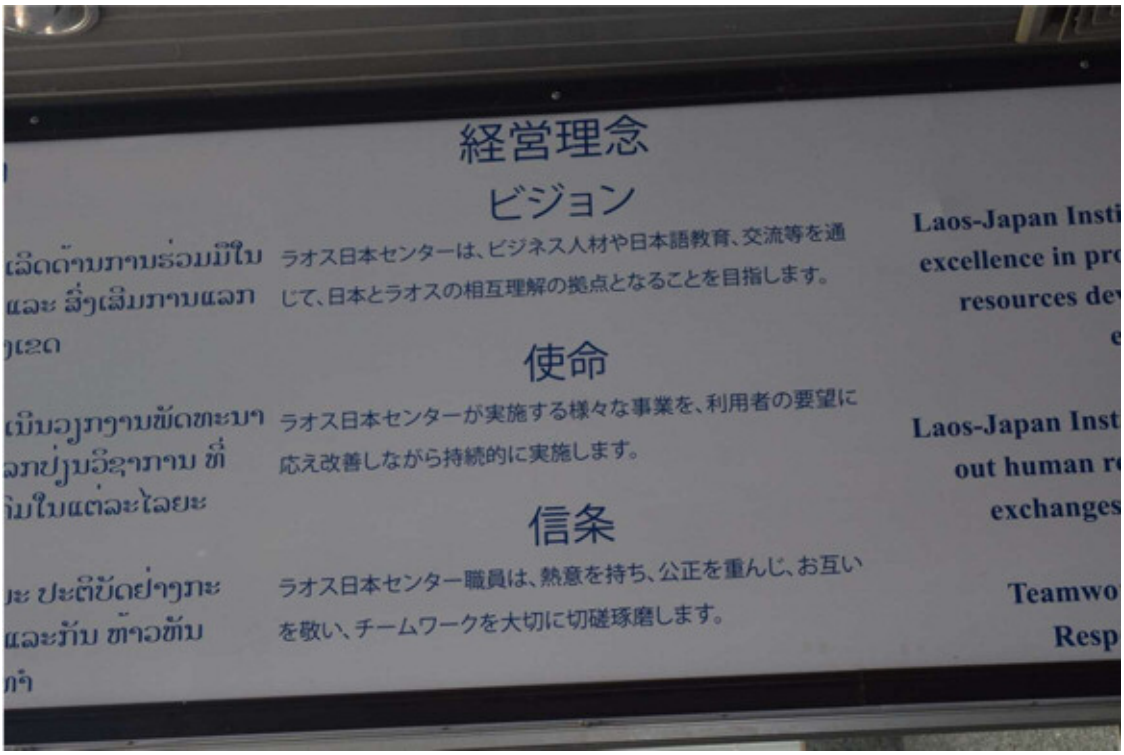
【統括】

ラオスは、発展途上にあるが電力資源に恵まれ、他国への電力融通を実施している。経済的には隣国タイとの関係が深く、通貨もタイバーツが日常的に使用されている。企業進出も徐々に進んでいるが、土地開発や環境の整備などが今後の課題であり、国民性も含めて専門的な技術職の養成には時間が必要である。川崎市とラオス日本センター（ＬＪＩ）とは大変深い関係にある。これまで毎年ここから日本に出かける研修生を、川崎市商工会議所にて快く受入れてもらっているとのことであった。また、今年１０月は所長が川崎市商工会議所を訪問し、１１月中に川崎市を訪問予定である。山田商工会議所会頭をはじめ、関係者がラオスを訪問の際、ビジネス関係の情報交換も実施している。

このように積極的に関係を深めている民間に比べ、行政レベルでの交流を進めていく上では国家体制の違い等いくつかの課題も散見されるが、日本の技術や人材、資金を含めた支援が着実に効果を上げていることを含め、本市としての支援のあり方を研究していく必要性を強く感じた。

本市からの記念品を渡す坂本団長

所長による歓迎の挨拶



掲げられた経営理念

ラオス国立センターにて

視察後、ラオス国立大学副学長を表敬訪問

ラオス国立大学にて